いつも読んでます 在学生からのメッセージ 読者とともに歩んで400号

「北から南を楽しみに」 山口裕太くん（商4）

連合県人会は現在30の県人会から成り立っており、各々の県人会が様々な企画・行事を通した日々の活動の中で、良き仲間を得、郷土の心を忘れずに活動しております。

幹部交代した今、これまでの活動を思い出すと大きな充実感と仲間に対しての感謝の気持ちが湧き上がってきます。「一人では出来なくても、良き仲間があれば、何事も精いっぱいやれる」素晴らしいことを教えてもらいました。

このような連県活動を毎月紹介して頂いているニュース専修の中の「県人会 北から南から」会員はもちろんのこと、その友人から父母にいたるまで毎月楽しみにしていると聞いております。これからも連合県人会をよろしくお願いいたします。（連合県人会本部前委員長）

大切な“ふれあいの場” 蘇 震宇くん（商3）

中国では吉林大学医学部を卒業。医学を志しましたが、「日本に行く」という子供のころからの夢が捨てきれず、4年前に来日。中国と日本を結ぶ医療ビジネスを目指し、専大商学部に入学しました。

「ニュース専修」は大学のニュースがくまなく載っており、留学生にとっては貴重な情報紙です。中国留学生会でホームページをつくっていますが、参考にさせてもらっています。

最も感謝していることは、中国の実家（吉林省四平市）にもこの「ニュース専修」が毎月、送られていることです。私たち中国留学生会に関連する話題が載っていると、国の両親はとても喜んでくれます。「ニュース専修」は大学と留学生、父母を結ぶ、大切な“ふれあいの場”だと思います。（中国留学生会前代表）

興味深い留学生記事 アイエレ・メシェシャ・ネゲヴォさん（大学院商学研究科博士課程）

9年前、旧文部省の国費留学生としてエチオピアから来日。専大の研究生となった96年の「ニュース専修」5月号に「海外から個性豊かな留学生たち アフリカから初めて」として大きく取り上げていただき、励みになりました。

以来「ニュース専修」は、留学生や国際交流の記事が載っている時は興味深く読みます。

この間、さまざまなことがありました。父の死、結婚、体調を崩して入退院を繰り返したこと…。民族間の対立で内乱状態にある祖国に思いを馳せ、文化も言葉もまったく異なる日本での指導の先生方に助けられながら、会計学の専門知識を深める毎日です。修士を修了し、博士課程に進学した今、大学で教壇に立つことを夢見ています。

情報リアルタイムに 寺門俊右くん（法4）

生田キャンパスに通っていた1年次は、大学の雰囲気に馴染むことに精いっぱいで「ニュース専修」を手にする余裕がありませんでした。

神田キャンパスでは、校舎入り口近くに置いてあるので気軽に手にすることが出来、よく読むようになりました。生田キャンパスでの出来事もリアルタイムに情報収集出来ます。大学の最新の動きが分かりますし、資格試験合格者の紹介、留学体験談、就職活動体験記など、先輩や同級生の記事は興味深く読んでおり、また体育会の活躍は頼もしく感じます。

入学式のキャンパスフォト特集では入学した頃を思い起こし、初心に返る思いがしました。以前に教えていただいた教授の新刊紹介を拝見し、先生の研究内容を垣間見て、

大学が教育機関であると同時に研究機関であることを改めて実感することもあります。（情報科学センター受付スタッフ）

紙面見て「充実感」 小原郁子さん（文3）

大学に入学したらぜひ、個人旅行で海外を訪れてみたいという動機で「国際交流会」に入りました。鳳祭の出店、プレハロウィン・パーティー、スポーツ大会などを通じてさまざまな国の留学生と交流。中国、韓国、台湾、オーストラリアなど仲良くなった留学生の祖国を訪れる機会にも恵まれ、当初、考えていた以上に発見や喜びが多く、会に入って本当に良かったと実感しています。

ありがたいことに私たちの活動は「ニュース専修」で紹介していただく機会が多く、紙面化された記事を見ることで活動中での苦労が報われ、充実感があります。

これからも「ニュース専修」にもっと取り上げていただくよう、後輩たちに引き継ぎ、さらに会を発展させていきたいと思います。（国際交流会前代表）

【ニュース専修１月号8・9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

いつも読んでます 先生方からのメッセージ 読者とともに歩んで400号

知的な刺激を紙面作りに 柘植光彦 文学部教授

専修大学に着任して間もないころのこと。当時「ニュース専修」の製作にかかわっていたニューピーアールの馬場英さん（故人）は「毎日新聞」の記者出身だった。じつは私は、大学院時代のアルバイトで、長い間「毎日新聞」学芸部の「学生」欄の紙面づくりをやっていた。その縁で、私は馬場さんのいい話し相手にされてしまった。

私が馬場さんにいつも話していたのは、「ニュース専修」は単なる無味乾燥な広報紙であってはならず、知的な刺激を与えるような紙面を作り、しかもそれをわかりやすく面白く伝えるべきだ、という考えだった。

馬場さんのおかげで何年間も、毎号書評を担当させられるはめになった。だんだんタネが尽きてきて、最後にはいつも締め切りギリギリになって、飯田橋駅前の喫茶店で原稿を書いていた。懐かしい思い出である。

投書欄など読者の声も 權田萬治 文学部教授

「ニュース専修」もずいぶん変わりました。

カラー化が進み、記事も全体としてとても読みやすくなったように思います。

プロの方が編集しているので、当然といえば当然ですが、署名入りの記事を書かれる教員の皆さんも専門的な話をやさしく書くのに協力しているのがよくわかります。

ページ数の制約があるので、なかなか実現は難しいでしょうが、出来るだけ身近の存在にするために投書欄などもあってもいいかも知れません。

紙の「ニュース専修」と並んで「ニュース専修」の編集委員時代に私が主張していた大学のホームページも充実して来ていますね。うまく住み分けて、「ニュース専修」もさらに魅力的な紙面作りをされるように期待しています。

専修三大学の一員として 森山軍治郎 北海道短期大学教授

短大でも独自の新聞を発行しようではないか。生き生きとした学生の姿、OBや地域との交流などを広く報せたい。教職員自らの編集・執筆のものを。

前学長の田中貞美先生を委員長に、5学科体制になろうとする22年前に開始した。紙名は学生からの募集で「われら北鳳」に。私もスタッフの一人だったが、取材から配付まですべて素人の手作り作業だったので、年3回の発行には熱も入ったが息も切れてきた。

「ニュース専修」の230号からその一部に組み入れてもらうことになる。毎号になった短大のページ、時に特集があり、プロの取材・執筆による質の向上はもちろん、専修三大学の一員としての新聞になったことが最大の収穫だった。

社会貢献めざした発信を 亀山 紘 石巻専修大学教授

「ニュース専修」の創刊400号達成に心からお祝いを申し上げます。専修大学の機関誌としての醇乎(じゅんこ)の格を築いてこられた関係者の皆様、おめでとうございます。「ニュース専修」編集委員の一人として喜びに耐えません。

97年に編集委員に委嘱され、皆様のご指導を仰ぎながら、以来7年間、輝かしい歴史の刻みを共有することができました。

石巻専修大学の紙面を飾る在学生主体の掲載記事の中に、しばしば開放センター事業を取り上げていただきました。石巻専修大学は、地域に根ざした大学として、教育・研究に携わる人々が大学の敷居を取り除き、それぞれの得意分野の体系化された知識を平易な言葉で、本物の中身をもった学問を伝える生涯教育の場を大切にしています。

また大学開放センターは、Outreach centerとして、より広範な地域社会への貢献を目指して、移動講座や高大連携および理科教育ネットワーク活動を展開していますので、これからも社会貢献を目指した魅力的なニュースを発信していきたいと考えています。

【ニュース専修1月号8・9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

いつも読んでます 校友からのメッセージ 読者とともに歩んで400号

愛する専大そして後輩たちへ ナポレオンズ

ボナ植木さん（昭50文）
「ニュース専修」400号おめでとうございます。私は今でも思い出します。あの生田キャンパスに向かう苦しい坂道を。毎日毎日、坂を登り勉学に、そしてマジックに励んでいたのです。まさにそれが私に健康と知識とマジックを授けてくれたようなものです。プロになって四半世紀。どんな逆境にあってもへこたれない強い肉体と精神を作ってくれた専大に感謝!

バルト小石さん（昭50文）
かの有名なマジック・コンビであるナポレオンズは、専修大学マジックサークルの出身なのである。71年（昭46）に入学した植木と私は、マジックという芸能を生業としてほぼ四半世紀を迎えております。人生のすべての礎は、生田のキャンパスにありました。専修大学生田校舎よ、どうか永遠でありますように。

野球そして役員の道へ 永島敏行さん 俳優（昭54文）

在学中は硬式野球部に所属し、あらゆる面で厳しく鍛えられました。3年次の時、映画『ドカベン』、続いて『サード』の主役の座を思いもかけず得て、役者の道に進みことになり、当時の「ニュース専修」でも紹介していただきました。結局、準硬式野球は公式戦には出られずに卒業しましたが、勉学を決しておろそかにしなかったですし、「これだ」と思ったものに一生懸命打ち込んできましたから悔いはありません。今の自分があるのは、学生時代の経験があったからこそ、と思います。

好きなものを見つけ、がむしゃらに取り組む。それは一度しかない学生時代にこそ出来ること。たとえ花開かなくても、必ず将来の糧となるはずです。

入学時に呼んだ寄稿文に衝撃 インド「死を待つ人の家」で奉仕活動 大川絢子さん（平14経済）

入学して間もない98年5月、大川絢子さんは当時の「ニュース専修」最新号を読んで衝撃を受けた。それは、マザー・テレサに感銘し、インドで70日間のボランティア活動をした商学部4年次（当時）の安野雄一さんの寄稿文だった。

「大学は勉強するだけのところではない。こんなすごいことに取り組む学生もいるんだ」。大川さんの大学観を変える出来事となった。「私も在学中にインドでボランティアをしようと決意しました。」そして卒業を前にした02年冬、念願がかなった。安野さんも訪ねたカルカッタのマザー・テレサゆかりの施設「死を待つ人の家」で、重い病を抱えた人々の世話をした。「私の下手なマッサージに涙を流してくれたおばあちゃんがいました。その人も数日後に亡くなって……」。約1カ月間の滞在で得たものは「優しさを捧げる大切さ」だ。

全学応援団チアリーダー部の主将としても活躍。現在はみずほ銀行丸の内支店に勤務しながらチアのクラブチーム「デビルス」に所属し、昨春の全日本選抜チアリーディング選手権大会で準優勝となった 。「笑顔で周りの人々を勇気付ける」チアの精神は、インドでの経験によって輝きを増した。

大川さんは在学中、安野さんから引き継いだ使用済み切手を集め現金化することに

よって恵まれないインドの人々に役立てる運動も続けてきたが、この活動は、後輩の田名部剛彦さん（平15経済）へ、さらに現役学生（岡田朋子さん経済2、内藤翼くん・文1）へと受け継がれている。田名部さんも卒業旅行としてインドでのボランティア活動を経験した。

馬場英さんとの出会い 元教務部長 仁科幹夫さん

「ニュース専修」担当の思い出は、当時の編集者・馬場英さん（故人）との出会いと重なります。

69年（昭44）、学園紛争の波は本学にも押し寄せ「ニュース専修」でも「窓ガラスや机などメチャクチャ」、「神田校舎を襲ったゲバ棒」、「学長キャンパスに立つ」などの見出しが躍る号外を発行しました。私は教務の文学部担当でしたが、「こういう時こそ、内容のある新聞を出せば学生に読まれるようになる」と当時の生田事務局長に進言。その翌日、呼ばれ「昨日、私に述べたことをこの人たちに述べよ」と言われました。そこに毎日新聞出身の馬場さんと朝日新聞出身の石戸谷さんがおられたのです。その時が馬場さんとの最初の出会いでした。

翌年5月の異動で、私は広報課に配属されました。そして「ニュース専修」に直接関わったのは17号から87号までの71回。発行日が迫ると、薄暗い町工場で同僚の石井務さんらと一緒に校正作業を連日深夜まで繰り広げました。

馬場さんが足を運んで取材し、65号から30回連載した〔生田界隈〕も思い出の一つ。小さなノートの数行のメモから情報豊かな記事が展開されるのには感嘆しました。単行本として出版されなかったのが惜しまれます。

76号から漫画「スパンヤキ」が登場。馬場さんと一緒に新宿の雀荘に福地泡介さんを訪ねて執筆をお願いしたことも思い出します。

【ニュース専修1月号8・9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

いつも読んでます 育友会・校友会からのメッセージ 読者とともに歩んで400号

学生の活躍が嬉しい 佐野秀子さん 育友会副会長

「ニュース専修」は私にとって、我が子の大学を知ることが出来る情報源の一つです。また、石巻専修大学や北海道短期大学の情報に関しては、「ニュース専修」が頼りです。毎回タイムリーな情報をいただけることは父母にとってありがたいことと思います。大学やスポーツ応援の時にお会いする学生の皆さんとは、我が子と同じ感覚でお話をし、記事の中での学生たちの活躍は、本当に嬉しく思います。

育友会も前年度から、より活発に活動しておりますので、出来る限り多く取り上げていただければありがたいです。これからも専修大学のファンの一人として毎月の「ニュース専修」を心待ちにしております。

母校を知る情報源 坂本伴治さん 校友会副会長（昭31商経）

400号となる「ニュース専修」。昭和43年の発刊は、私が校友会のお手伝いを始めた時期と合致します。総合機関紙として大学の動向を報道し続け、卒業生には最も手っ取り早い情報紙です。

校友会の支部情報欄は、支部の会員も楽しみにしており、遅れると事務局に催促がくるほど。地方の支部会員の多くは、この「ニュース専修」が母校の唯一の情報源だといつも聞いています。自分自身も支部総会などに出席する時は、過去の支部情報などをバックナンバーで確認し、ファイルにして記録メモに利用しております。

学生、育友、校友、役員、教職員とすべてを対象とする情報紙は、とかく総花的になりがちだが、編集者のご苦労に感謝しながらも、より良い紙面づくりにご努力願いたい。

【ニュース専修1月号8・9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.